

昭和61年度 第1回

# 研究助成論文集

——医療と人間観——



LIFE SCIENCE PROMOTION ASSOCIATION

社団法人生命科学振興会

# 目 次

巻頭言 本会理事長 松岡英宗

医療と人間を結ぶために 本会専務理事 中川米造

はしがき

## 医療と人間観 (50音順)

- 新しい人間観に基づくこれからの生と死についての考察 ……………石原明 …… 10
- 医師・患者関係の在り方について ……………衛藤俊邦 …… 15  
——説明同意概念を中心に——
- がんの病名認知の有無と、Quality of Life ……………柿川房子 …… 21
- 日本人の健康観と死生観 ……………柏木哲夫 …… 33
- 情報としてのバイオエシックス ……………加藤尚武 …… 42
- 病いの経験と死のイメージ ……………桐田克利 …… 47
- 看護婦から見た臨死患者 ……………黒田浩一郎 …… 65
- 医療と穢れ ……………新村拓 …… 73
- 原則と特殊なケースの間で ……………竹田純郎 …… 78
- 都市における伝統医療の機能に関する事例研究 ……………田邊信太郎 …… 83
- 民俗医療の研究 ……………林美枝子 …… 89  
——ミクロネシア・ボンベイ州をケース・スタディにして——
- 高度医療と家族 ……………宝月誠 …… 106  
——集中治療室入室者の家族調査から——
- 生命観の確立に果たす「音」の作用と意識への影響について ……………和田高幸 …… 121  
——「言霊」の解明とセラピーへの応用——

氏 名 和田 高 幸 (代表)  
日本ニュートラルポイント研究所代表

井 村 宏 次 (文責)  
生体エネルギー研究所長

連 絡 先 〒558 大阪市住吉区长居東3-3-53・704号  
日本ニュートラルポイント研究所  
06-697-9695

## 生命観の確立に果たす「音」の作用と 意識への影響について —「言霊」の解明とセラピーへの応用—

### はじめに

「祝詞」や「言霊」というと、今どきなせ古くさいことを、と思う人もいるだろう。しかし、われわれはある目的をもって「祝詞」の音声学的研究に取り組み、そして思いがけない発見をした。というのは日常生活で最も身近にある音声、用い方によっては人々の意識に強く作用するだけでなく、意識を廻るさまざまな事象に感応することが確認されたからである。

日本は古来、「言霊の幸はふ国」と言い習わされ、言葉の扱い方にはとりわけ慎重な態度をとるのが国民性の常とされてきたのであるが、宗教行事はもちろんとして、日常のコミュニケーションにおいても音声現象は私たちの生活と切り離すことができない。日頃は特に意識されることなくごくありふれたものとして扱われる音声現象であるが、これについては科学的に捉えられてきた部分と、そうでない部分があると思われる。

ところで、音声現象がつくり出す心理的生理的効果はさまざまな場面で確認されているが、それ以上の効果をもたらす未知の音声現象が存在している可能性も否定できない。つまり、日常生活での体験を超えた現象を励起する力がある種の音声現象にはそなわっていると思われる。そのような音声現象は一般に「宗教的」、「霊的」なものとして取り扱われ、科学的なアプローチは十分行なわれていないのが実情である。

たとえば「言霊(コトタマ)」として古くから伝承されている現象は、音声としてどのような性質をもっているのだろうか。「言霊」とはそもそも何か、ということについては一先ず保留しておくとして、ある種の音声現象が人びとを非日常的な意識に導引することは否定できない。たとえば催眠術も、音声による暗示が引金となっている。日常的な音声を非日常的に使用することにより人々を霊的效果に導く過程が検証できるならば、そこに「言霊」の作用を確認することは決して無理なはずではないはずだ。

「言霊」解明の切口として、われわれは霊的な作用の発現を前提として奏上される神道の「祝詞(ノリト)」に着眼した。古代からの伝統であるノリトには一定の形式があり、その形式をふまえ、前以って文章化されることが常であるが、実際には即興的に奏上される詞が少なくないといわれている。つまり、ノリトの内容は、発声や文章づくりの技法だけでなく、その場の雰囲気や状況など不確定な要



素によって影響され変化するということである。

そのような即興的な性質が霊的作用によるものかどうかはともかく、われわれは主として音声面から「ノリト」へのアプローチを試みた。それによって、ノリトの音声のどの部分が感覚や意識に対して影響を与えているのかを確認することができるだろう。

昭和62年7月16日、われわれは取材のため、奥吉野・天川村にある天河大弁財天社にやってきた。毎夏恒例の大祭で、その日は宵宮であった。

夕刻、弥山（ミセン）山頂で採った御神火が社殿に運ばれる。そして、日没とともに祭のセレモニーが始まり、音楽や舞踊が奉納される夜半にクライマックスを迎えるのである。社殿は賑わいのなかにも厳かな雰囲気にも包まれながら、同行した仲間たちは日常では体験できない世界と交流する快感に酔い痴れた。

役行者（エンノギョウジャ）の開基による天河社の草創は飛鳥時代に遡り、古代から水分（みくまり）信仰の拠点とされている。その宮司、柿坂神酒之佑氏（写真）は、人間界と神霊界（現象として直ちに確認することが難しい異次元の世界）をつなぐ「ナカトリ」であるが、古神道はもちろん山伏の修行をもきわめた神業者であり神道の伝統を今日に伝える数少ない人物といえるだろう。学業を経て、幾多の体験と厳しい修行に裏づけられた柿坂宮司のノリトは、晴朗な響きとりズム、そして威厳をもっており神道の伝統をよく伝えている。したがって、今回の研究にとってまたとないサンプルを得ることができたのは幸運であった。研究は、大祭で奏上される「ノリト」の録音と分析によって、その音声学的特徴を抽出することが主要な課題となるわけであるが、「霊的」作用の発現が期待される「ノリト」の効果は、参会者の意識の変化となって現れるはずである。個人の意識の変化を測定することは容易ではないが、祭の前後の人々の表情を観察したり、感想をきいたりすることである程度補うことができたと思う。

### 音声は特殊な意識相を招く鍵か？

ロックコンサートの音響は強くなるばかりである。耳をつんざくエレキギターの骨太な高音、床をゆるがし身体にズーンとこたえるベースとキーボード……、そこにシャウトするボーカルが加わると熱気はいっそう強まる。聴覚の受容限界いっぱい、この大音量にノッてゆるける大人数はそう多くはないだろう。

しかし、若者たちは、酔、う、シビレ、る。

個々の若者のこころはひとつになり、ひたすら酔う。

そのとき、彼らのこころには何か心理学的な変容が起っているのではないだろうか。

一方、静寂のなかで瞑想行を行なっている人びとがいる。禅堂の中でも、密教の求聞聡持法という難行にはげむ人も、……そして、ビルの一室、「瞑想ルーム」で、静かなシンセサイザー音楽や自然音のBGMに、ゆったりとこころと身体をゆだねる人びともいる。やがてそれらの人たちは、現実ともうつつとも知れない「瞑想境」に入ってゆく。このときにも、こころには何らかの変容が起っているにちがいない。

かつてG. フロイトは、こころの大海に存在する無意識を発見した。それは「大海」の大部を占める存在であり、人間の行動を支配する巨大な心理的エネルギーの「海」なのだ。

フロイトの業績はのちにフロイト学派の心理学者によって、さまざまに発展、深化されることになったが、もうひとりの著名な心理学者C. G. ユングは「無意識」の構造について、さらに詳細な地図を案出し提案したのであった。いずれにせよ、現代の心理学が「無意識」ぬきで語れないことはいうまでもない。

しかし、本稿でとりあげているテーマにとって、さらに重要な示唆を与えるのは、現UCLA・デビス校の心理学者、C. T. タートの「アルタード・ステーツ」説である。

タートはフロイトやユングの説を敷衍したうえで、こころの構造について、ピラミッド形に分類表示するのではなく、〈意識のかたち〉について注目したのである。われわれ人間は、目覚めて行動しているごくふつうの意識状態と、アルコールに酔っている時や夢見状態、瞑想状態などの変った意識状態のふたつをゆききしている。そして――

前者を通常意識状態 (Ordinary States of Consciousness=OSC) 後者を変性意識状態 (Altered



States of Consciousness=ASC) ——と、名づけたのだ。

その大要を示すスペースがないので簡単に説明すると、われわれ生きた人間は四六時中「外受容器」(五器官)を介して外界からの情報を、「内受容器」を介してさまざまな身体内情報を、それぞれ入手している。ふたつの情報群は、基本的な意識の覚醒に影響する十のプロセス(下位系)に伝達され、相互作用を行ないながら、入力に対応した意識の「かたち=相」を現しているのである。十の下位系については図-1を参照されたい。この観点からいえば、われわれは日常の生活のなかで、内外の入力に応じたさまざまな意識相を連続的に体験しつつ生きているといえよう。

タートもいうように、宗教の実践現場においてわれわれは、その儀礼を通してさまざまな特殊変性意識を体験するのである。瞑想の意識相はその代表的なものであろう。また、ごく普通の宗教儀式(セレモニー)においてすら、日常とは異なった堂宇空間のなかで日常的には体験しえない照明や集団的な集心理状態、プロ導師による経文や呪文、そしてノリトなどの朗詠や奏上を聞くのであるから、その場への参集者たちが軽重の差こそあれ、ある種のアルタード・ステーツに入っていると見えるだろう。

日本の伝統的な神道儀礼において、ノリト奏上は最も基本的な構成要素である。神々の系譜や由来を朗じることによって神々をほめたたえる部分と、氏子の願いを神前に音声をもって奏上する部分からなるノリトは、その音韻においても神主の奏上朗詠技法においても、ユングのいう「民族的集合無意識」の大海と密接不可離な「響き」や「波動」を放ってしかるべきである。神主の一種単調な朗詠音声は、外受容器を通して入力されるとともに、参集者たちの下位系には内受容器に生じた情報入力とあいまって、一種特有なアルタード・ステーツを形成するにちがいない。この特殊意識相のもとで参集者たちは、時空感覚の変容、宗教的情動の発動、自己イメージの一時的変容……など、さまざまな「非日常的体験」をもつことだろう。

この現場においてこそ、「言霊」は本来的な機能である神霊の次元を開く鍵となったのである。そもそもあらゆるコトバは、人間のこころと行動を方向づける最大規模のベクトルであるが、宗教的儀礼に用いられる経文や聖文、それにノリトなどは、それらが持つ歴史的に洗練されてきた儀礼の場で用いられるとき、アルタード・ステーツの発動を招来することによって、神霊的次元を意識の上に投影する機能を発揮するにちがいない。

以上みてきたように、聴覚の入力限界ぎりぎりの大音量下におかれた若者たちに「酔い」という一種のアルタード・ステーツが生じる一方、聴覚への小音量の長時間的な入力が呼吸法の実践とあいまって「瞑想アルタード・ステーツ」を生じる瞑想行の例もある。禅堂における行は、まったく逆に「無音の長時間経験」が「禅アルタード・ステーツ」の形成に寄与していることは疑いない。このように外界からの音声の入力は、人間が特異な変性意識を体験するための必須条件なのである。この場合、外界からの入力に呼応して、入力の条件や性質に対応する内部下位系が「共鳴的」に発動されることに目を配っておきたい。

それでは、神道祭礼におけるアルタード・ステーツ形成の音声学的基盤は、どのあたりにあるのだろうか。宗教における神霊的次元を解明するにあたり、いかに現代科学が進歩したからといってもそうおおくは期待できないにしろ、幸いにも音声学的アプローチが手つかずのままで放置されているようである。幸運なことに、日本には古来より「言霊」の伝統があるうえ、神道のノリトには「言霊成分」が強く含まれていそうであると気づいたわれわれは、ノリトの音声学的研究に足を踏み入れたのである……。

### 「祝詞」の知られざる霊的部分(ノリトの音声学的研究)

祝詞は元来、神の詔り言をつたえるものといわれ、その神徳を聞かせることによって、祈る者に対して大いなる力を得させることが目的とされる。祝詞は、形式の上からみれば一定の体裁をとるものであるから、その作成には習熟が必要だ。しかし形式面でいくら優れていても、本来の目的である「神威の霊動」を発現させることはできない。祝詞奏上において、音声が重視される理由がそこにある。

人間の音声は、他の生き物に較べるときわめて複雑な特徴をもっている。すなわちピッチ変化が可能なため、表現力がゆたかで、微妙な差異をも伝達できるという長所となっている。人間の声は、吐く息によっておこされる声帯の振動が原音となり、声道特性がこれに付加されて発生される。一般に人類以外の生物では、声道のコントロールは不十分で、声帯によるピッチコントロールによってのみ



情報伝達が行なわれているという。

ノリトの音声は、誰が聞いてもそれとわかる独特の調子とリズムをもっている。人によっては、それが一本調子の歌のようであったり、ウナリ声の持続として知覚されるかもしれない。しかし、サンプルを分析してみると、ノリトの音声は非常に高度にコントロールされたものであり、通常の音声現象にみられない特徴を確認することができた。但し、これから述べる特徴が、どの神職者にもあてはまるというものではないということをおこなわなければならない。神職者によっては、発声訓練や本質的理解を経ないまま、羅列された文字を形式的に音読している場合も少なくないからである。

音声現象の分析にあたっては、サウンドスペクトログラフ(リオンSG-09)を用い、発声時の周波数成分とそのレベル量について時系列で測定した。分析結果は、周波数成分の時間的変動が濃淡をもったパターンとして表示される。このパターンは、一般的には、「声紋」といわれているもので、音声の識別や医学的検査などにも用いられている。

### 一定の音律を保つ母音の働き

さて、音声の意味を伝える伝え方は、言語学的には二つの側面に区別される。すなわち、子音、母音のつらなりとして把握できる音の継起によって意味を伝える分節的側面と、もうひとつは声の高低、強弱、長短によってあらわされる超分節的(韻律的)側面だ。高低アクセントによる意味の変化は超分節的特徴としてあげられるが、音声の持続現象として捉えられるノリトの場合、ピッチ変化が少なく一定の音律が保たれている。さらに、流れるように朗詠される単音系列と持続音の圧力には強弱変化が少ない。そのため、ノリトでは分節的側面が重視されることになる。

母音は、長く伸ばそうと思えば、息の続く限りいくらでも伸ばすことができる。しかし、子音の場合はそうはいかない。たとえば「K」や「T」を持続して発声するためには、「KKKKK……」と連発しなければ不可能である。しかし、「KU」という音を持続させると、それがいつのまにか「U」という母音の持続音となっていることに気がつく。音声の分節的側面は、子音の働きによって特徴づけられるのであるが、基底には母音の持続音が存在しており、〈子音+母音〉の組合せによって伝達する意味を付加している。つまり、母音の持続的発生を基底として、一定の秩序で子音による分節化がおこなわれているのが特徴である。

ノリトは、一度聴いただけでその意味や内容を理解することは難しい。そこで、意味や内容よりも、まず音声学的な特徴に注意が向けられるようだ。左右両半球に分れた大脳の機能から類推すれば、ノリトを聴くという行為は右半球(直観的な認識機能)優位ということになるだろう。ノリトは文字によって記述される言語学的内容伝達よりも、サウンドによる音響特性を重視した様式をもっているからだ。

### ノリトのリズム

一定のフレーズを連続的に発声するノリト(図-2)の周波数分布は、500ヘルツ前後の音を基本周波数としてほぼ均等な縞模様をあらわす倍音構造となっており、音程は一定である。図では、ホルマントの移行が曲線状に描かれており、音の「ツナギ」がきわめてスムーズであることが理解される。それは発声の変化に伴う口蓋の運動が自由で滑らかであるためと推測される。図の上段にある記録は発声レベル量の時間的変化であるが、発声の強さもほぼ一定に調節されており、これが一本調子な印象を与える原因となっている。

一方、所々にみられる断続的な継目は子音の発声によるものである。子音は非反復波形による不規則な波である。子音がわれわれの耳に影響を及ぼす気圧変動はまったく突然に起り変化はきわめて不規則になるのが常であるが、母音の持続のなかに子音がとけこむように巧みにコントロールされているのがこの図からうかがえる。

日本語の五十音はすべて母音を伴うので、子音の発声による一時的な持続音の「破れ」は、母音の結着によって直ちに修復されてしまう。子音による分節化がおこなわれても母音による一定の持続音に復調してしまうことがノリトらしさを保っている原因といえるだろう。

規則的現象は単純さと明晰さをともなっている。本来ならば不規則で複雑な波形をもつ子音を、母音の持続という規則的系列に取り込むことで平坦化単純化する作業は、きわめて明晰な直観にもとづいているともいえそうである。



柿坂宮司によるサンプルとそれをまねた対照サンプルと比較すると、発声時系列における子音の処理に決定的な相違がみられる(図-3-A、B、C)。図は唇音に属するハ・マ行、「ヒフ(ミ)」の音声サンプル(AとB・Cの録音条件は異なっている)であるが、ここでも宮司のサンプルは音のツナギが滑らかで連続的な流れをもっている。このような声紋は声帯の部分的な振動だけでは不可能であり、呼気のコントロールによる腹腔の共鳴作用の上にもこそ成立するものであると思われる。すなわち、「腹からの声」がこういった特殊な声紋をつくるのである。発声における息づかいと舌の動きのコントロールが、掠れがなく、安定した清澄な響きをもたらすのであろう。

さらに、子音によるノリトの分節化は一定の規則にもとづいて行なわれており、単調な持続音にリズムを与えているのがうかがえる。やや長い時間経過(25秒間)における周波数分布(図-4)には、一定のリズム(律動)を認めることができる。このリズムは、ノリトの音声に特有のパターンを与えており、ノリトの即興性がこのリズムの「ノリ(乗り)」によって左右されている可能性もあると思われる。「乗り」のよいノリトは人々をよりたやすく意識の変容状態に導き、「向う側の世界」と感応する回路を形成するのをたすけることだろう。

なお、発声を調べてリズムをつくり出す技術として、三、五、七、それぞれのパターンにもとづく音節化が行なわれていることもここで指摘しておかなければならない。

### 持続する超低周波音

祭における儀式的なかに「開扉の儀」というのがある。雄叫び(オタケビ:「オーッ」という音声の持続的発声)とともに神殿の扉を開く厳粛な儀式である。雄叫びは、3回繰り返されるが、この音声のサンプルを確認してみることにしよう。

まず驚くべき特徴は、周波数分布が700ヘルツ以下の低音域に偏っていることである。対照サンプルと比較するとよくわかるが、まるでハイパスフィルターを作用させたときのように、見事に中・高音域がカットされている(図-5-A)。さらに詳細にみると(図-5-B)、80~120ヘルツを基本周波数として第6倍音まで確認できる。雄叫びの響きが700ヘルツ以下の音に抑えられていることについては、それなりの理由が存在するはずである。

超低周波音の発声は、単に声帯を震わせるだけでは不可能である。呼吸量、声道の形と開閉、腹腔の共鳴などさまざまな要因が作用しており、コントロールは容易ではない。しかし容易でなければならないほど、コントロールの技術が要求される意味は大きいと見なさなければならない。ピッチコントロールが容易ではない赤ちゃんの泣き声(図-6)と比較してみると一層明白であるが、言語的訓練を経ない自然の声は叫び声に近く、ほぼ全帯域に亘って周波数が分散しているという特徴がある。

一般に、低周波音は「聞く」というよりも「感じる」ものであって、音域が低ければ低いほど、それは体感できる振動に近づいてゆく。神道の行法に鎮魂振魂法というのがあるが、からだの一部を振わせることで邪気を退散させ、より快適な状態へ導くことが古代から民間で行なわれてきたようだ。振動にも近い低い音の動きが、意識になんらかの影響を与え、未知の存在や自分自身の知らない部分と交流する回路を開くのではないかと推測されるが、それはきわめて感覚的な理由に依存していると思われる。

ところで超低周波音の持続は、雄叫びだけでなく一般のノリトにもあらわれている。いや、一貫した超低周波音の上にノリトが成立しているといっても差支えないだろう(図-7)。

音声の発生がまず母音から始まったとすれば、雄叫びの響きは最も原始的な形を継承しており、ノリトの原型として今日まで保存されてきた可能性がある。つまり音声現象のもっとも古い基層を形成していると推測されるのである。

持続する低音の流れは、中・上声部を支持し、その音に混ざり合って響く。つまり低周波音は、上声部を支える土台の役割を果しているのだといえよう。音楽を聴いても、低音が響いてこなければ何か物足りないと感じるのと同様、土台が安定していない建物では安心して居眠りもできないからである。

なお付け加えるならば、雄叫びの基本周波数(80~120ヘルツ)は、人間がいちばんリラックスし最も快い状態で発生する脳波、アルファ波(8~12ヘルツ)に共振している可能性があるということだ。この脳波の状態は、いわゆる超能力の発現と関係しているといわれるが、いずれ「言霊」のもたらす霊的效果との関連が見出せるかもしれない。



## ヴィブラート

音楽用語であるヴィブラートとは、ストレートな音に対して、なんらかの外的な条件によってできる音の“揺れ”であるとひとまず定義しておこう。

ヴィブラートは、楽器や声楽の演奏において、音に色づけするために意図的に行なう場合もあれば、自然に行なっている場合もある。“揺れ”の振幅や回数には相当個人差があり、それが音色の差となって演奏者の個性を特徴づける重要な要素となっている。

ヴィブラートのある音とない音を比べると、ヴィブラートのある音が一般的に好まれるのであるが、それは耳に心地よく響いてくるためだろう。尺八の学習においては“首振り3年”といわれるほどヴィブラートのコントロールが厳しく要求されるという。ヴィブラートは、それほど重要なものである。

ところで、声なり音を震わせることで、どのように演奏したらいへん奇麗なものになり、人の胸を打つか、そして音楽にイノチを与えることができるかについて、フランスの高名なフルート奏者、故マルセル・モイーズ氏が語っている。

「人間は誰でも、昂奮すれば体が震えてくるんだ。感情が昂ってきて、何か歌うように高ぶってくれば自然についてくるのがヴィブラートであって、それを意識するのもおかしな話じゃないか」(「flatus 4」：フルート音楽研究会)と。

洋楽ではまず声楽が、続いて弦楽器が、そして管楽器が追従してヴィブラートの技術を学んでいったが、この手法に関しては、断然わが国が差をつけている。つまり、ヴィブラートが意識に作用するものであることに早くから気づき、楽器の構造にもとりいれてきた。たとえば、能管にはノドといわれる狭窄部分が作られており、音程を故意に破らせる構造になっている。

ヴィブラートをコントロールするのは呼吸と咽喉(ノド)であるが、管楽器の演奏においても、とりわけノドの使い方が重要であることが最近の研究でわかっている。吸気のコントロールは横隔膜でも可能であるが、呼気のコントロール、つまり唇から出る空気の量を調節する器官はノド以外にはない。ヴィブラートをコントロールするのもノドの働きであって、息(イキ)にイノチを与えるという重要な役割を担っているのだ。

ところで、サンプルにおけるヴィブラートの回数はどの位なのだろう。図-6-Bでは1秒間に約9回の揺れが確認される。これは一流のオペラ歌手がおこなうヴィブラートの回数に匹敵する。意識的にコントロールされたヴィブラートは1秒間に10回が限界とされているからだ。われわれはよく人気歌手の声に“シビレル”ことがあるが、ヴィブラートが“シビレ”を誘発している可能性も否定できない。

“シビレ”は聴覚器官をとおして大脳に伝わるが、脳神経のマッサージ効果が快感をもたらす結果になっているかもしれない。マッサージによってわれわれの意識は昂揚し、日常から非日常、表から裏の現象へとトリップしているのだろうか。脳神経刺激がホルモン性機作に及ぼす影響も無視できないが、ヴィブラートの回数が、快さの指標となるアルファ波の波長に近いこともここで指摘しておくべきだろう。

ヴィブラートが意識的に行なわれるにせよ、あるいは無意識的に行なわれたにせよ、そこに当事者あるいは対照群における自我の消滅をみることは決して困難ではない。ヴィブラートによって霊的症状が誘発され、無意識の世界と感応することが可能であれば、そこに未知の情報系の存在を確認することもできるはずである。いずれにしてもヴィブラートが、未知の情報系と交流する回路形成に重要な役割を演じることはほぼ間違いないと思われる。

### 言霊をめぐる日常と非日常 —結びにかえて—

ノリトの音声学的特徴を迫ることで、われわれは一種の変性意識に至る原因を学んできた。しかし非日常的な意識状態をもたらすものが、単にそういった特徴だけに依存していないのは明白である。ノリトの録音テープをヘッドホンステレオで聴いたとしても、異次元へトリップできるかどうかは保証の限りではない。われわれは現象だけでなく、そこに至る過程についても確認しておくべきだろう。祭の主要な部分であるノリトの奏上までにはいくつかのセレモニーを経なければならないが、祭のセレモニーはあくまで厳粛で、その空間は清浄であることを前提条件として認識しておきたい。

ノリトの奏上による〈神霊界との交流〉の結果としてわれわれは爽やかな解放感を体験する。しか



し、その解放感はどこからくるのだろうか。

都市化が進んだ今日の情報社会では、自然界の周期的現象と疎遠になり生活のリズムもまた不規則に乱れがちである。そのために現代人はかなりの不安と緊張感に晒されていると思われる。一種単調なノリトの響きは明瞭で規則的であるが、それはすでに述べたように母音による一定の強さをもった持続音が原因である。不規則な非反復波形をもった子音は、一時的な衝撃によって緊張をもたらすがやがて母音の持続と低周波音の影響、すなわち波形が一定で長い波長をもった音に呑み込まれて衝撃はとり除かれる。

不規則な変化によって起る心理的緊張が規則的な波動作用によって解消される過程もこれと似ている。緊張があると筋繊維の硬直や生理器官の変調となってあらわれてくるから、規則的なリズムと巨大な波動に乗ってしまえば身体はラクになるはずだ。緊張がほぐされてゆくのも、ノリトが行なう母音と子音の調和現象に心身のリズムを準えてその働きを強めようという、一種の“ナゾリ”作用にもとづいているのかもしれない。

本稿では研究対象をノリトに限定したが、同様な手法を用いた仏教「声明」の分析をはじめ、キリスト教の典礼における聖詞の朗読など、東西の宗教をこの角度から解明する方向が残されている。つまり、“音声文化人類学”がうちたてられる可能性があると思われる。「はじめに言葉ありき」という聖書の一句がわれわれに重い直観を与えるのであるから。

また、日本では古来、美声は“腹”から発せられるといわれてきた。呼吸とは天の一息に発し、“息より発し息に帰る”のである。快い声とは、声帯のみの振動ではなく全身の振動であるとされる。「声は身の中の風にて臍下丹田より出で、肺の臓を門戸とし喉へ出るもの也」（花伝書）。本研究によって検出されたノリト奏上における超低周波成分は、この音声をもつ声帯由来性だけでなく、全身共鳴という由来性を証明していると思われる。いいかえると日本語は快い声で発されるときが“正しい”声であり、自他に共鳴と共感をよびおこすのである。腹からの声特別な声紋を表すのも当然だろう。

「言霊」という固有の言語学的概念を継承してきた日本人であるが、われわれは意志の伝達を重視するコトバの表にある日常的な部分だけでなく、コトバの表を支える裏の部分、つまりサウンドとしてとらえられる非日常的な部分が、われわれの意識に重大な影響を及ぼすことを確認することができた。“言霊”的解釈にしたがえば、声（コエ）は心（ココロ）の枝（エダ）を示すという。コエの使い方ひとつでココロが自由自在になるのなら、五十音の発声練習も大いにやってみる価値はありそうだ。

母音をともなった一音一音が明瞭に発音される日本語の音声学の優位性は、今後世界という舞台で確認されはじめるだろう。一音を一字で標記できる利便性もまた評価されねばなるまい。ところで、日本語音声の明瞭さは米麦による低脂肪の食生活によるものであるという説（井上超夫『魔の未来予測』：大陸書房）がある。発声における明瞭さは精神に曇がないことを示す根拠と日本人は考えてきたが、声がこころと行動を方向づける最大限のベクトルであることをふまえると、日本人の行動原理の基本に「音」あるいは「音声」が位置づけられていることが理解できる。したがって、「言霊」が、音声による行動原理の規範を示したものであるという解釈がそこに成立すると思われる。

こころと声は切りはなしては考えられない。とすれば、声のトレーニングがこころの状態を変える“心理療法”として使うことができるだろう。……というのがわれわれの結論のひとつであった……。

現在の社会では、文字という記憶媒体による知識の習得に追われて、五官の機能を拡大向上させる感覚的な訓練が疎かにされているようである。音声は本来習得されるべきものであり、カナリヤやウグイスでさえも、成鳥の鳴き声をまねて、さえずりが上達するのだという。われわれは、日本語の音声学教育についても反省しなければなるまい。

この研究にあたって研究助成を賜った生命科学振興会に感謝するとともに、天河大弁財天社の宮司・柿坂神酒之佑氏をはじめ、㈱リオン大阪営業所の犬矢正治氏、大平毅氏、琵琶スタジオの宮下富実夫氏・上条甲吾氏、㈱ニックの松井幹男氏、小児科医師の国井優子氏、その他大勢の方々のお世話になりました。誌面を借りてお礼を申し上げます。

図-1  
「サイ・パワー」(工作舎: C.T タート著 井村宏次訳)より

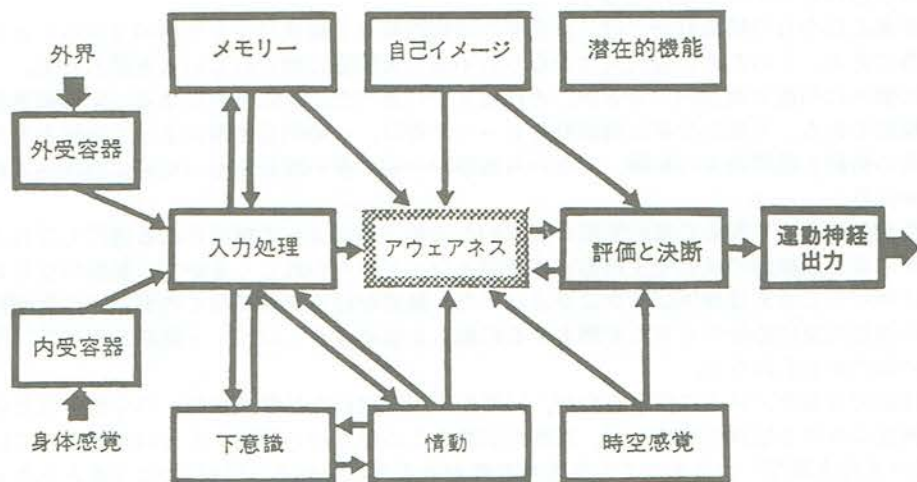


図-2 10kHz 2.4秒

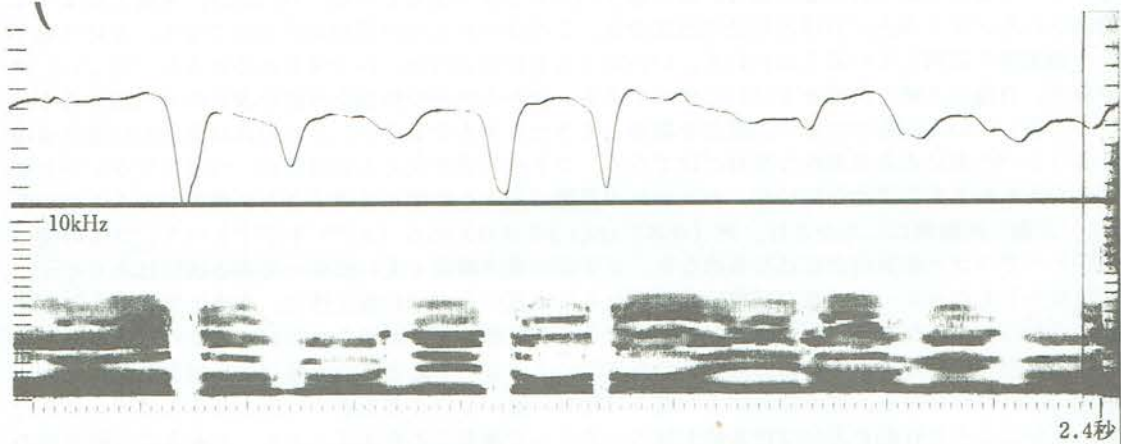


図3-A 10kHz ヒフ 2.4秒

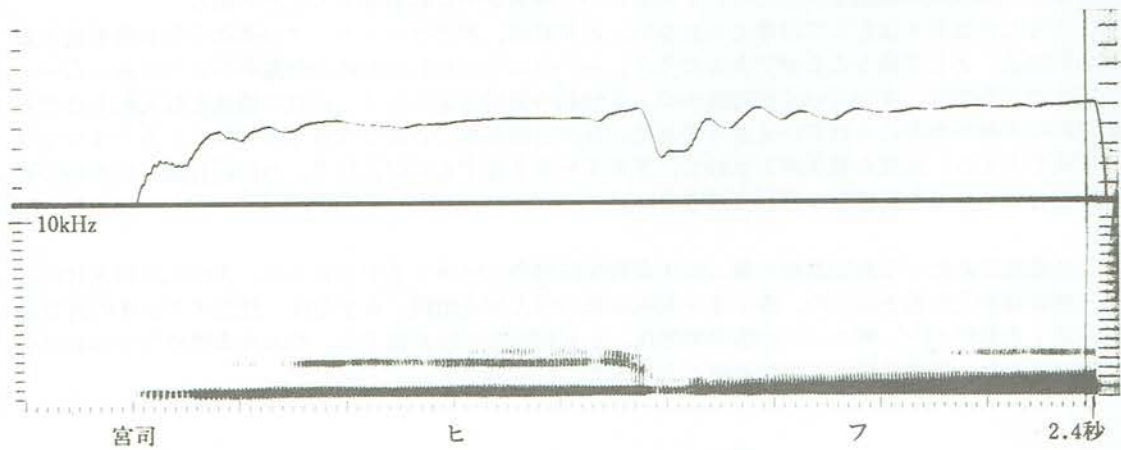




図3-B 10kHz ヒフミ 2.4秒

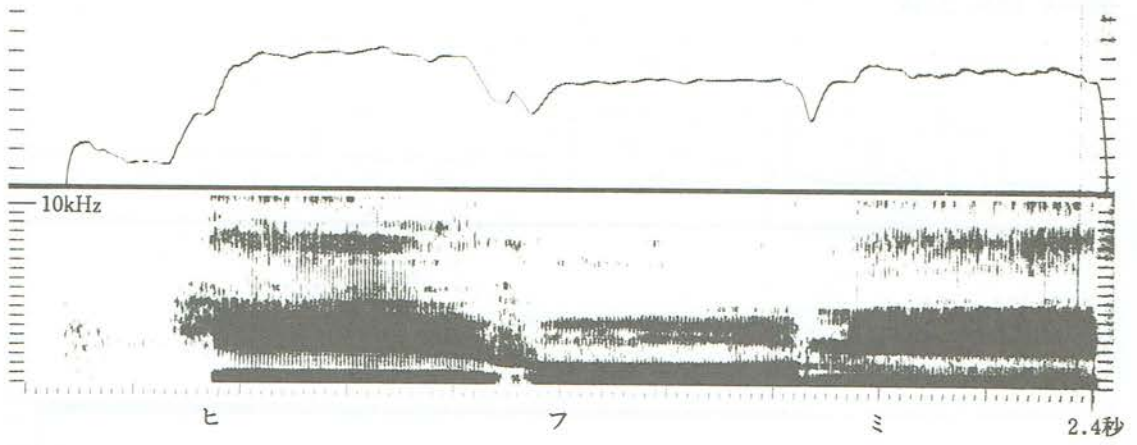


図3-C 10kHz ヒフ 2.4秒

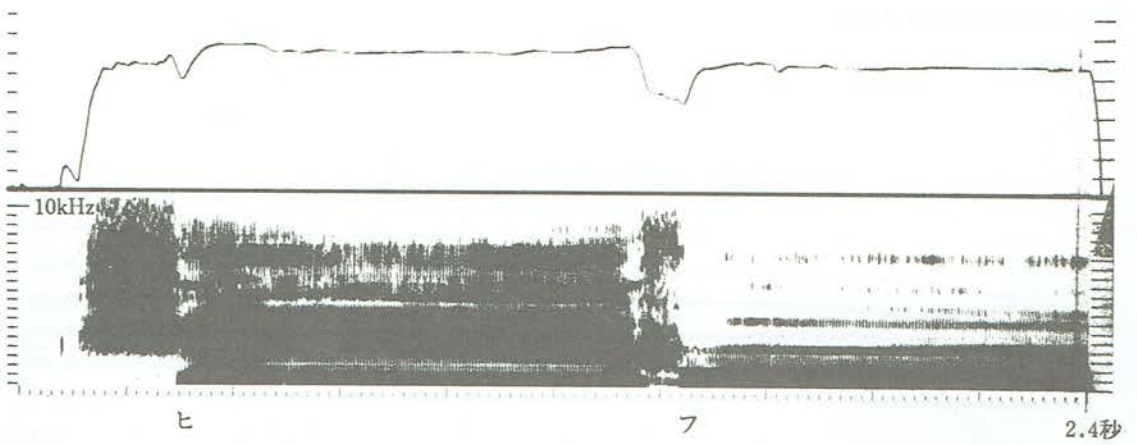


図-4 1kHz 2.5秒

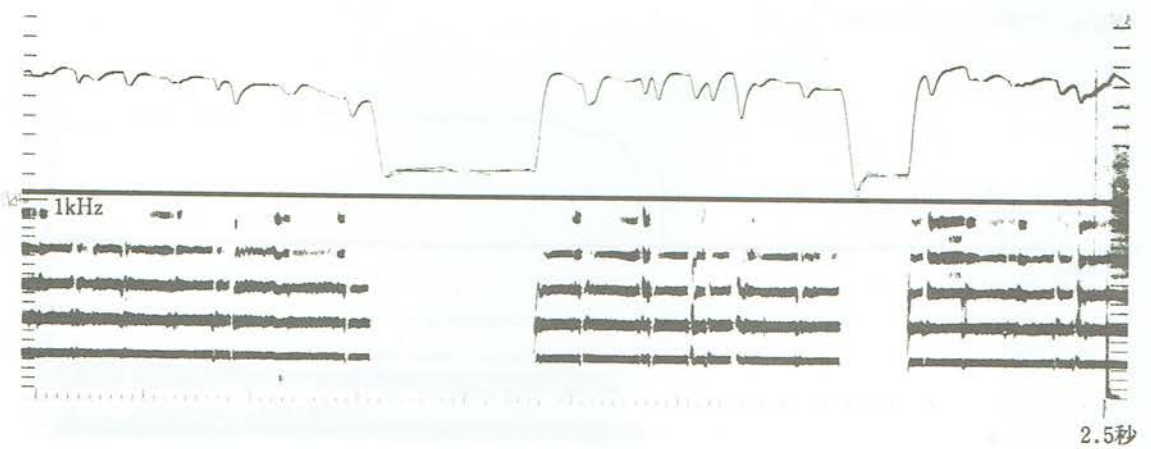


図5-A 10kHz 2.4秒

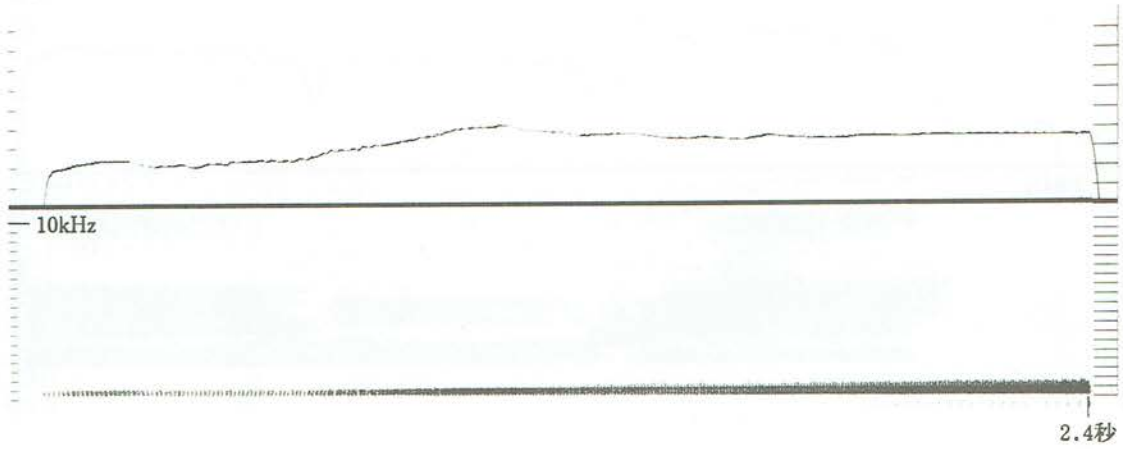


図5-B 1.65kHz 1秒 7.2秒

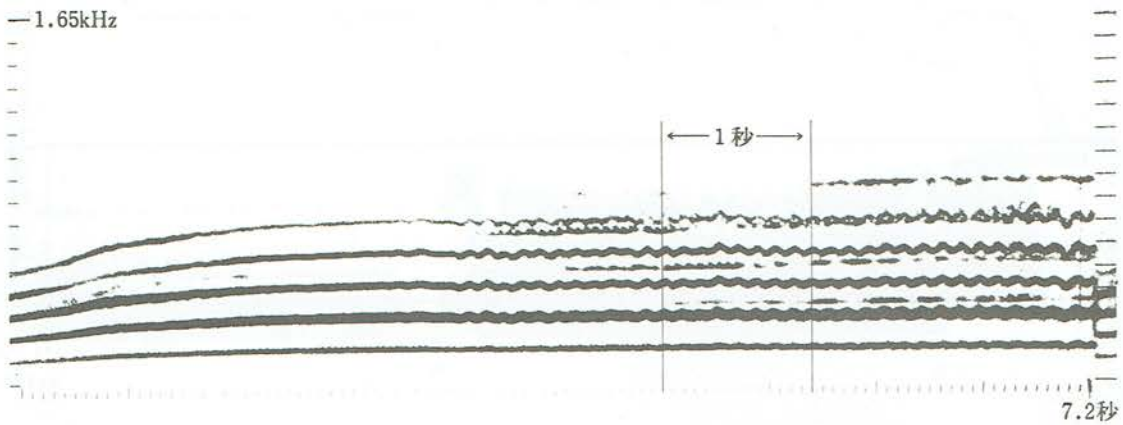


図5-C 10kHz ノイズ 2.4秒

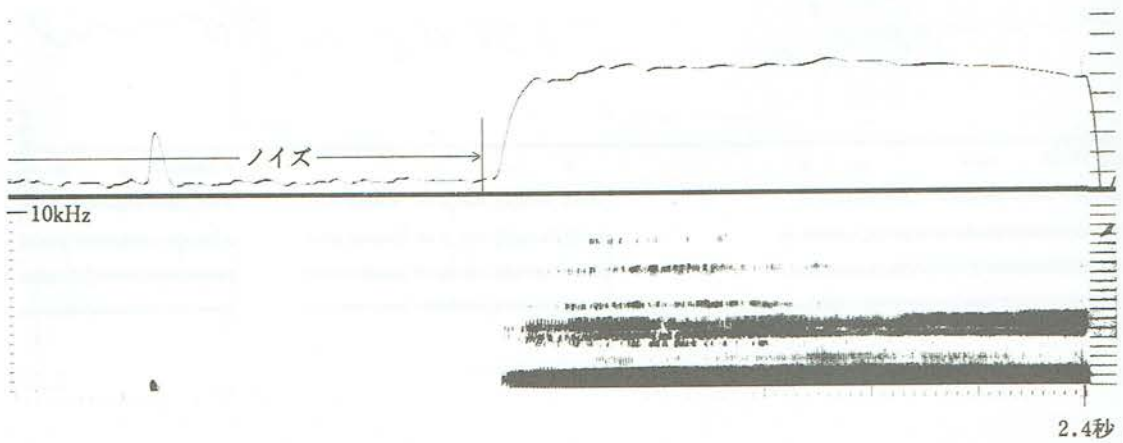




図-6 10kHz 2.4秒

— 10kHz

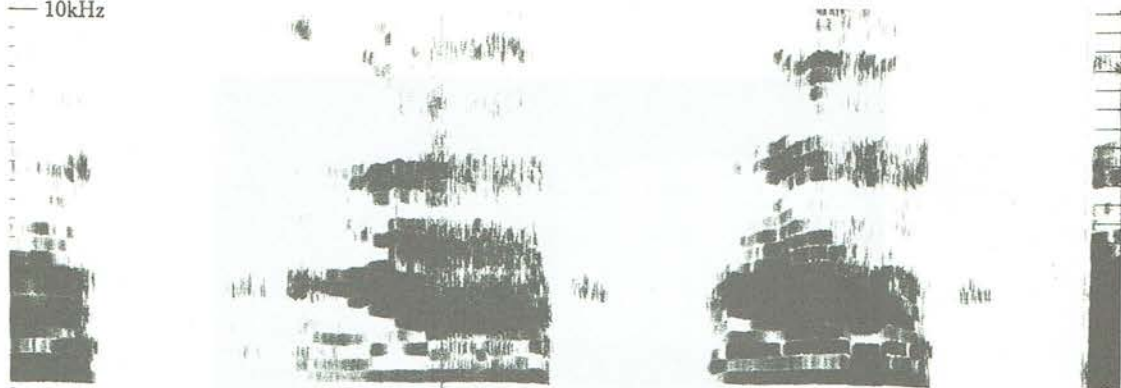


図-7 10kHz タカマノハラ 2.3秒

2.4秒



タカマノハラ 2.3秒



天河大井財天社・例大祭で  
(昭和62年7月17日)

## 助成金事業協力企業

この研究助成事業には、本会会員の皆様から貴重な資金の提供を受けております。

本事業についてのご理解とご支援に対し、深甚なる敬意と感謝の念をもってお名前を下記のとおりに発表させていただきます。

大阪ガス株式会社  
関西電力株式会社  
協和発酵工業株式会社  
近畿日本鉄道株式会社  
株式会社三和銀行  
株式会社スズケン  
株式会社住友銀行  
株式会社大和銀行  
立石電機株式会社  
東京ガス株式会社  
日本電療医学院  
松下電器産業株式会社  
株式会社ワコール



松岡英宗

(敬称略・五十音順)



●本助成金論文の選考につきましては、慶応義塾大学名誉教授の沢田允茂先生を審査委員長に迎え、厳選なる審査が行なわれました。

昭和61年度 第1回  
研究助成論文集  
医療と人間観

発行日 平成元年2月1日  
発行元 社団法人生命科学振興会